

## 安藝之助の夢

昔、大和國、遠市と云ふ處に宮田安藝之助と云ふ郷士がゐた。……「ここで私は、日本の封建時代には兵士兼農夫の特殊階級、英國の郷士の階級に相當するものがあつて、郷士と呼ばれた事を讀者に告げねばならない」

安藝之助の庭に大きな古い杉の樹があつて、蒸し熱い日には彼はいつもその下で休んでゐた。或大層暖かな午後、彼がこの樹の下に、同じ郷士の友人二人と酒を飲みながら、雑談に耽つて居るうちに、突然眠りを催した、あまり眠いので、お客の前だが、少しまどろむ事を許して貰ひたいと友人に頼んだ。それから、その樹の根に横になつて、こんな夢を見た、——

庭に横になつて居ると、何か立派な大名行列のやうな行列が、すぐそばの坂を下つて來るのを見たので、それを見物しに起き上つたと思つた。大層立派な行列である事が分つた、——これまで見た事のない程いかめしいものであつた。それからそれが彼の家に向つて前進して來た。その先驅に立派な服装をした若い人々の一隊があつて、きらきらする青い絹のかかつた御所車を曳いて居るのを見た。家に近く來た時行列がとまつた、それから立派な服装の人——確かに位の高い人——がその行列から進み出て安藝之助に近づき、鄭重にお辭儀をして、それから云つた、

『わが君さま、御前に参りましたのは常世とこよの國王の家來でございます。主人國王は私に代つて御挨拶を申し上げ、そして御用を何でも私に仰せつけ下さるやうにと申しました。國王は又宮殿へ御出で下さる事をお願致しますと、申上げよと申します。それ故どうかお迎にさし上げましたこの御車にすぐお召し下さいませ』

かう云ふ言葉を聞いて安藝之助は何か適當な返答をしたかつた。しかし彼は言葉の出ない程驚き且つ當惑した、——それと同時に彼の意志は彼からとけて行くやうであつた。それで家來が命じた通りにしかできないかつた。彼は車に乗つた。家來は彼のわきに乗つて、何か合圖をした。曳き手は絹の綱をとつて、南の方へその大きな車を向けた、——それから旅行が始まつた。

驚いた事には、忽ちのうちに、車がこれまで見た事のない支那風の大きな樓門の前で止まつた。ここで家來は下りて云つた、『私は御着おちやくを知らせに参ります』——それから見えなくなつた。しばらく待つたあとで、安藝之助は、紫の絹の着物と、高い位を示す形の、高い帽子を冠つた二人の氣高い人が門から来るのを見た。この人々は恭しく彼に挨拶したあとで、車から下りる手傳をして、大きな門を通つて広い庭を横ぎつて、宮殿の入口に案内した。その宮殿の表ては東西へ數哩の距離に廣がつて居るやうであつた。安藝之助は、それから非常に大きな立派な應接室へ通された。案内者は彼を上席に導いて、彼等は恭しく離れて坐つた。その間に禮装した侍女は茶菓を運んだ。茶菓のすんだあとで、二人の紫の着物をきた侍者は安藝之助の前に低くお辭儀をして、つぎの言葉を彼に申し述べた、——宮中の儀式に従つて銘々代る代る述べながら、——

『只今、申上げます事は、私共の光榮ある義務でございます、……こちらへお招きした理由につきまして。……主人國王は、あなたに御養子になつて戴く事をお願でございます。……そして丁度今日、結婚式をあげる事は王の願、又命令でございます、……王の姫君、内親王と。……私共はすぐに謁見室へ御案内致します。……そこで陛下は丁度お待ち受けでございます……しかし先づあなたに適當な禮服を……お着せ申す事が必要と存じます』

かう云つて侍者は一緒に立ち上つて、金蔀繪の大きな簞笥の置いてある床の間へ進んだ。簞笥を開いて、そのうちから立派な品の色々の着物と帶、それから冠をとり出した。それ等のものを安藝之助に着せて内親王の花婿にふさはしくした。それから謁見所へ案内した。そこで安藝之助は常世の國王がいかめしい高い黒の帽子を冠り、黄色の絹の着物を着て玉座の上に坐して居るのを見た。玉座の前にはお寺の佛像の如く、不動の姿勢で華やかに左右に大勢の大官が居ならんでゐた。そして安藝之助は、その眞中へ進んでしまりの三拜の最敬禮をした。王は丁寧な言葉で彼に挨拶して、それから云つた、

『わが面前へ呼ばれた理由については、すでに聞かれた通りである。御身をわが獨り娘の婿にするときめたから、——それで婚禮は今行ふ事にする』

王の話が止むと、楽しい音楽の音が聞えた。それから美しい官女の長い行列が幕のうしろから進んで、花嫁の待つて居る部屋へ安藝之助を案内しに來た。

部屋は非常に廣かつた。それでも婚禮を見に集つた大勢の客を入れる事は中々できなかつた。

安藝之助が王女に面して、設けてある座蒲團の上に坐つた時——一同が、安藝之助に對して敬禮した。花嫁は天津乙女のやうに見えた、彼女の着物は夏の空のやうに美しかった。そして婚禮は大歓迎のうちにやはれた。

そのあとで新夫婦は、宮殿の一部分にかねて準備してあつたいくつかの部屋へ導かれた。そこで彼等は大勢の貴い人々の祝詞と數へきれぬお祝の品々をうけた。

幾日か後に安藝之助は、再び玉座のある部屋へ呼ばれた。今度は以前よりも一層鄭重に迎へられた、それから王は、彼に云つた、

『わが領土の西南に萊州と云ふ島がある。御身を今度その島の知事に任命した。その人民は忠實で柔順である。しかしその法律は未だ常世の國の法律と一致してゐない。それからその習慣は正しく整理されてゐない。責任を以てできるだけ、その社會状態を改良する事を任せる、それで親切と智慧を以て彼等を治めて貰ひたい。萊州への旅行に必要な準備はもう既にできて居る』

そこで海岸までは貴族や役人の大護衛に伴はれて安藝之助と花嫁は常世の國の宮殿から出かけた。そして王の準備した立派な船に乗つた。それから順風におくられて、安全に萊州に行つた。そしてその島のよい人民が、彼等を歓迎するために岸に集つて居るのを見た。

安藝之助は直ちに、彼の新しい任務にとりかかつた。その任務は別のむづかしいものではなかつた。知事となつて初めの三年間は、法律を制定してそれを行ふ事に重に忙しかつた。しかし彼は助けてくれる賢い相談役をもつて居た、そして彼はその仕事を不快と思はなかつた。全く終つた時に、昔の習慣できまつて居る儀式や、禮儀に出席するより外になすべき實際の任務はなかつた。病氣や貧苦のない程に、この國は健康地であり、又肥沃であつた。人民は善良で、法律を破る事はかつてなかつた。安藝之助はそれから萊州に二十年住んで治めた、——合せて二十三年とどまつた。その間に何の悲しみの影も彼の生涯をよぎらなかつた。

しかし彼が知事になつてから二十四年目に一大不幸が彼に來た。七人の子供——五人の男の子と二人の女の子——を生んだ彼の妻は病死した。彼女は壯麗な儀式をもつて範龍口の地方の美しい丘の頂上に葬られた。そして非常に立派な記念碑が墓の上に建てられた。しかし安藝之助は、もはや生きてゐたいと思はない程、彼女の死を悲しんだ。

さて、きまり通りの忌服が終つた時、常世の宮殿から萊州へ使者が來た。使者は安藝之助にくやみの言葉を傳へて、それから彼に云つた、

『私共の主人常世の國の王が、あなたにくりかへして云ふやうにと、命令なさる言葉はかうであります。』今御身を御身の人々と御身の國へ送りかへすつもり。七人の子供の事は、王の孫である

から適當に養育する。それ故その子供については心配には及ばない』  
この命令を受けて安藝之助は、おとなしく出發の用意をした。一切の事務が片つき、顧問や信頼した役人達に別れを告げる儀式も終つた時に、彼は港まで恭しく見送られた。そこで彼のために送られた船にのつた。船は碧い空の下を青い海へと乗り出した。そして萊州の島の形までも青くなつた。それから灰色になつた、それから永久に消えた。……そして安藝之助は不意に目をさました——彼自身の庭園の杉の樹の下で。……

しばらく彼はぼんやりして目がくらんだ。しかし二人の友人は未だ彼のそばに坐つて、——酒を飲みながら談笑して居るのを見た。彼は當惑したやうに彼等を見つめて、大きな聲で叫んだ、『不思議だな——』

『安藝之助殿は夢を見られたに相違ない』一人は笑つて、叫んだ。『何か不思議なものを見ましたか』

それから安藝之助は自分の夢の話、——常世の領土の萊州の島に、二十三年間とどまつた夢の話をした、——しかし彼等は實際彼が數分間しか眠らなかつたから驚いた。

一人の郷土は云つた、

『なる程、君は不思議なものを見ました。私共も君が眠つて居る間に妙なものを見た。小さい黄色の蝶が一つ君の顔の上をちよつとの間飛んでゐた。そして私共はそれを見てゐた。それからそ

れがその樹のそばで、君のわきの地面にとまつた。それからそれがとまると殆んど同時に大きい蟻が穴から出て来て、それを捕へて穴の中へ引きこんだ。丁度君が眼をさます前に、正しくその蝶が又穴から出て来て、前のやうに君の顔の上をヒラヒラ飛んで居るのを見た。がそれが不意に消えた、どこへ行つたのだから分らない』

『多分それは安藝之助殿の魂だ』今一人の郷土が云つた、——『たしかに安藝之助殿の口へ飛び込むのを見たと思つた。……しかしたとひ、その蝶が安藝之助殿の魂であつたとしても、その亭はその夢の説明にはなりさうにない』

『蟻が説明するかも知れない』初めの人云つた。『蟻は不思議なものだ……或はお化けかも知れない。……とにかくあの杉の樹の下に大きな蟻の巢がある』

『見よう』この思ひつきにひどく感心して、安藝之助が叫んだ。それから彼は鍬を取りに行つた。

杉の樹の廻りから下へかけての地面は最も驚くべき風に、蟻の廣大な群によつて掘られてゐた。さらにその上に蟻はその掘つた處へ建築した。そして礫と粘土と葎（た）や莖（た）でできた極めて小さい建造物は、奇妙に小さい都會に似てゐた。外のものより著しく大きな建物の真中に、黄色のやうな羽と、長い、黒い頭をもつた大層大きな蟻の身の廻りに、小さい蟻の驚くべき群がゐた。

『あゝ、私の夢の王が居る』安藝之助が叫んだ、『そして常世の御殿がある。……こりや大變だ。……萊州はその、どこか西南にある筈だ——あの大きい根の左の方に、……さうだ、ここにあ

る。……あゝ、不思議だ。今度はきつと範龍口の山と姫君の墓を見つけられる』……  
彼はこはれた巢の中をしきりにさがした。そしてたうとう小さい丘を見つけた、その上に佛教の碑に似た形の、水で角のとれた小石が据ゑてあつた。その下に彼は——粘土につつまれた——雌蟻の死體を見つけた。

*The Dream of Akinosuke. (Kawaidan.)*

(田部隆次譯)